

學鐙という知との出会い

岡田芳郎

「學鐙」は、ユニークネス、先見性、文化性において際立つ個性を持つPR誌です。一八九七（明治三〇）年三月に「學の燈」という誌名で創刊され一九〇二（明治三五）年「學燈」となり、さらにその翌年「學鐙」と表記が変わり今に至っています。現在発行されているPR誌として最も長い歴史を持ちます。本稿では、「學鐙」の特長を三つのポイントから考察してみましよう

第一に「ユニークネス」です。母体である丸善の事業のもつ独自性が「學鐙」に色濃く表れます。創刊号に掲載された発刊の辞は、「題して學の燈といふ、アーク燈か、螢火か、吾人之を知らず、照すものは照すの理あつて、之を點するのみ、其果して效の需むへきや否やは、社会各人に於て存す、吾人敢て之を人に強ひず。」という文章から始まります。社会に役立つかどうかはわからないが自らの信じるところに従つて行動するのだという毅然とした姿勢が表明されています。誌名の「學の燈」には「The Light of Knowledge」と英文が付してあります。また少し後からの号には「THE BEACON LIGHT OF LEARNING」とあります。すなわち、「學鐙」は、知の灯りであり、学びの灯台の灯を指したのです。PR誌

でありながら商売のためだけのメディアをつくるというより自らの高い目標を掲げたところに誇りと社会的責任感が伝わります。日本のPR誌の嚆矢といわれる「學鐙」のこの方針はこの後続々と続く日本の各企業のPR誌企画の指針となりスタイルを決めたといえるでしょう。創刊号には、発刊の辞のあと、「祝辞」のページが続きますが、たった五行の文章があるだけです。多くの祝辞を頂いたがまだ我々はそれを受ける能がないといいます。「世の初刊に際し妄りに名士の祝辞を満載して其博交を銜ふもの吾人之を極忌す故に謹て之を珍藏するも敢て誌上に掲げず妄断多罪辱知願くは諒焉」という言葉で終わります。晴れやかなお祝い気分で始める事業ではないという厳しい覚悟の表明なのでしょう。創刊号の目次には、「◎論説」として、「発刊初想 管水生」「學の燈に所感を寄す 法学士織田寛」「我国教育の精神 杉山文悟」「国字私考 栗山生」、「◎雑録」として、「志賀重昂氏著河及び湖沢の一節」「南米の名士ボリヴァー 福田松堂」「日本貿易の近況 瀧村立壮生」、「◎詞苑」として、「詩歌俳数十首」、「◎新刊紹介」として、「新条約集外教種」、「◎雑報」として、「航海上の一発見、新年三日の郵便集配高、人の思想を写真す、

仏国における人造絹糸の近況、戦争前後の教育界、沈降自在なる四十節の砲艦、レナルド博士、世界第一の巨人、世界第一の大樹、海水より金を探る、など硬軟取り混ぜ興味深い話題が一四並んでいます。「學鏡」の編集構成は大体この形が続き、論説と雑報が太い二本柱です。

第二の特長は「先見性」です。例えば、一九〇二（明治三五年）年に発表した「十九世紀に於ける欧米の大著述」は知名人七八人からの回答を得て選ばれ、第一位にダーウイン「種の起源」、続いてゲーテ「ファウスト」、スペンサー「綜合哲学体系」、ショーペンハウエル「意志及び表象としての世界」、コント「実証哲学講義」、「ブリタニカ大百科全書（第九版）」などが票を集めました。この記事は知識人たちの大きな話題となり、「學鏡」が一層注目されるきっかけにもなったのです。また雑報欄のトピックスは常に世界と日本の新しい出来事や人の動向を報じ、関心を集めました。一九一（明治四四年）一月発行号には、トルストイの終焉が生々しい通信として細部にわたって報告されます。同年四月発行号には今日我々が使用するような小型の辞書が「Modern Dictionary」として紹介されます。そして「學鏡」の特長である数多い広告はまさに新しい時代の文物を紹介します。ウエリントン・タイプライター、オノト万年筆、安全剃刀、金属製懐中用マツチ（今日のライター）はじめ都会の先端的な仕事や生活の憧れの品物です。一九一〇年代後半にはクリスマスの広告が掲載されます。「クリスマスは一年の最大嘉節、天国の顕現也、

家庭の世界也、婦人と小児の天地也」と記し、「サンタクロースは丸善屋上に宿して幸福なる貴婦人令嬢紳士諸君の来るを待つ」と述べ、進物に適する品物を列記します。我が国にも家庭でクリスマスを祝うという習慣がこの頃から浸透してきたのです。丸善はそのシンボリックな場所であり、「學鏡」はそれを広めるメディアだったのです。

第三の特長は「文化性」です。これまでの記述でも「學鏡」の文化性は充分表れています。一九〇二（明治三五）年から編集長をつとめた内田魯庵（作家・評論家）の才覚と交友により多くの新進文芸家、学者、言論人がここに集うようになりました。「學鏡」は、新しい才能を見出し育てる場所でもありました。例えば夏目金之助（漱石）の「カーライル博物館」が掲載されたのは一九〇五（明治三八）年一月号です。同じ年に漱石は「ホトトギス」誌に「吾輩は猫である」を連載し、世に知られるようになりましたが、「カーライル博物館」を読むとまだ生硬な文章でここから漱石が出発したのだという印象を受けます。

「學鏡」は、最も古い歴史をもつ現存のPR誌でありながら常に時代の半歩前、一歩前を歩き続けてきました。丸善の商品がいつも「新しさ」「情報性」を持ち、トップレベルの品質を約束するように、「學鏡」は理念・目標を大事にするコンテンツチュアルな雑誌としての誇りを保ち続けています。

（おかだ・よしろう 広告ジャーナリスト）